

論文審査会

審査委員が一堂に会して議論を深め、
最終審査に進む論文を選定しました



NRIグループ社員による1次審査の結果、20論文（大学生の部10、高校生の部10）が2次審査に進みました。

2次審査では、20論文すべてを、NRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さん、岩田徹さんの3人を含む8人が評価しました。

2017年11月22日、NRI東京本社会議室にて審査委員が一堂に会し、論文審査会を開催しました。2時間に及ぶ議論を経て、最終審査に進む10論文（大学生の部5、高校生の部5）を選定しました。



【論文審査会 審査委員】

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

岩田 徹 いわた書店 取締役社長

審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室 室長

山之内 亜由知 ITアーキテクチャーコンサルティング部 上級専門職

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

本田 健司 サステナビリティ推進室 室長

2017年11月22日、審査委員8名がNRI東京本社会議室に集まって論文審査を行い、最終審査に進む論文を選定しました。その議論の一部をご紹介します。なお、性別や学校名など応募者に関わる一切の情報は伏せられた状態で、審査は行われています。

大学生の部

真摯な姿勢で地方の魅力と可能性を追求

〔論文審査会 対象論文〕 *文中での呼称

- ・ 建設前から始めるインフラツーリズム戦略 ~インフラ総建て替え時代への提言~ *「インフラツーリズム」
- ・ IT人材育成型スマートスクールタウン構想 ~ずっとここで暮らせる街づくり *「IT人材育成」
- ・ 鹿児島県の医療業に現場起点型病院経営イノベーションを! *「鹿児島県の医療業」
- ・ コンパクトシティ実現へ向けた公共ライドシェアリング *「ライドシェア」
- ・ 地方が外国人学生にとっての「第二の故郷」になることを目指して
~「日本ふるさとプロジェクト」の全国的実施による新しい可能性の創出~ *「第二の故郷」

※他に5つの論文が審査されましたが、ここでは最終審査に進んだ作品について取り上げました。

上位3作品が他と一線を画すレベルの高評価

桑津—「インフラツーリズム」「IT人材育成」「鹿児島県の医療業」の評価が、他を引き離して高くなっています。中でも「インフラツーリズム」は群を抜いており、特別審査委員も社内の審査委員もバランス良く評価しています。

「インフラツーリズム」— インフラへの複合的視点

池上—身近な観光資源を発掘して売り出していくという具体的提案が興味深く、汎用性も高いと思います。

岩田—インフラはその地域の誇れる景観であり、資源でもあるという、大切な視点を提示していると思いました。

齊藤—インフラを機能論だけでなく景観美やエンタメ的な要素との複合化で捉えて、総合的価値を引き上げているという観点に共感しました。ただ、インフラを観光資源化している事例はすでにあるのと、日本の課題はインフラの老朽化と更新に関わる危機感であり、これに対する解決力は限定的ではないかと感じました。

野呂—私は、国としての大きな課題であるインフラをどう再生していくのかに着目し、地方の観光ビジネスも発展を遂げる可能性があることを示唆している点を評価したいです。インフラ整備の現場において、とても重要な視点なのではないでしょうか。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 池上 彰さん

山之内—インフラツーリズムに適した施設にするために「勝利の方程式」を具体的に提言し、周辺施設や導線などについて自らの行動を元に提案している点が、素晴らしいと思いました。

*

桑津—「IT人材育成」や「鹿児島県の医療業」についてはいかがでしょうか。

「鹿児島県の医療業」— 論文としての完成度

最相—私は「鹿児島県の医療業」を推したいと思います。まず、論文として構成がとてもよく練られています。ヒアリング調査やデータを駆使した現状分析も鋭く、経営者起点型と現場起点型という視点から「時間」という概念を切り出し、解決策として建築デザインに落とし込む流れは画期的で、はっとさせられました。汎用性も高く、病院だけでなく、介護施設、学校、企業オフィスなどにも応用できると思いました。

岩田—病院経営を現場から考え直したところが新鮮だと思いました。医療従事者も市民であり、医療や介護の問題は地域全体で考えるべきで、市民一人ひとりにもできることがあるはずだと触発されました。

山之内—具体的なデータに基づいて原因を考察し、裏付けとなるデータも引用して結論に導いていて、論文として非常によくまとまっていると思います。

桑津—医療における生産性という敷居の高くなりがちなテーマに、フィールドワークで正面から取り組んでいる論文で、現場に触れた重みを感じられます。

「IT人材育成」— コンセプトと具体策を明示

齊藤—「IT人材育成」は、大学生が懸命に考え抜いた提案であると感じ、高く評価したいですね。IT人材の将来の不足を踏まえ、ITを正式科目として小中高校に導入して、戦略的に人材育成を図るという考え方に共感しました。

本田—私もそう思います。文章が論理的で読みやすい上に、ファクト（数値）も説得材料としてうまく入れられています。解決策が具体的で、かなり緻密に考えられていると感じました。「地方の課題をイノベーションで解決する。」というテーマに対して、他の論文に比べてイノベーションの要素が強いと思い、評価しました。

野呂—地方から流出する若者を抑制したい、魅力的な進学先・就職先を作りたいという筆者の強い思いに共感しました。課題を明示化し、その解決策として「IT人材育成型スマートスクールタウン構想」のコンセプトと具体策が明確に示されていて、実現可能性も高いと思います。

桑津—皆さんのご意見を聞いていると、「IT人材育成」と「鹿児島県の医療業」はそれぞれ評価が高いので、最終審査に進めることに異論はないと考えます。



特別審査委員 最相 葉月 さん



特別審査委員 岩田 徹 さん



審査委員 齊藤 義明



審査委員 山之内 亜由知

市民レベルで地方の課題に取り組む

桑津—他に評価が高いものとして、「第二の故郷」と「ライドシェア」が挙がっています。

「ライドシェア」—地方の実情にもっとてらして

池上—地方が抱える課題に「ライドシェア」を導入して解決しようという具体策は、認知症の人の自動車事故が問題となっている今、評価できると思いました。

桑津—民間企業では曖昧になりがちな問題を公との連携によって解決しようとする視点やアプローチが評価できると思いました。

齊藤—人口が縮小し、足のないエリアが拡大する中、コンパクトシティ化に伴う郊外部の「ライドシェア」の実現方策を検討した姿勢は評価できます。ただ、ドライバーへのインセンティブ、需給マッチングの仕組み、システム投資、運用費などのビジネスモデルは弱いと思いました。

岩田—「ライドシェア」については、実際に私の住む田舎で可能だろうかと考えてみたのですが、書かれているようには行かない部分も多いと思いました。

最相—簡単に「ライドシェア」を行えない実情が地方にはあります。住民に移住をしてもらうなど、痛みを伴う部分があり、このシステムは身を切る覚悟で行う必要があることを理解する必要があると思いました。

「第二の故郷」—ひとがつなぐ世界

岩田—市民レベルで世界がボーダーレスになることが実現されていく、良い提案であると思いました。

最相—ふるさとと友人づくりが地方活性化と国際交流、ひいては平和につながるという、当たり前のことですが大変重要なことを思い出させてくれる論文でした。

桑津—可能ならば、「ライドシェア」と「第二の故郷」の2つも最終審査対象として残してはいかがでしょうか。

一同—賛成です。

桑津—それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「インフラツーリズム」「IT人材育成」「鹿児島県の医療業」「ライドシェア」「第二の故郷」に決定します。最終的な順位は12月22日のプレゼンテーション審査を経て決定します。



審査委員 野呂 直子



審査委員 本田 健司



高校生の部

地域を元気にしたいという 強い想いに根差した斬新な提案



[論文審査会 対象論文] *文中での呼称

- ・おじいちゃん☆おばあちゃんGO
—多様性を維持し持続的イノベーション促す主体的な取り組み— *「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」
- ・「夕張メロン科」—地方と若者の挑戦 *「夕張メロン科」
- ・北海道日高地方に見る一次産業の存続 *「日高の馬」
- ・ユニット港湾“バズル港”による災害支援 *「バズル港」
- ・文化を地方から世界へ ~互いを理解し合う劇で世界をもっとよくしよう!~ *「演劇」

※他に5つの論文が審査されましたが、ここでは最終審査に進んだ作品について取り上げました。

上位2作品に高い評価が集中

桑津—「夕張メロン科」と「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」の評価が突出していて、ほとんど差はありません。「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」は審査委員8人中4人が最高評価をつけています。

「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」—地域の資源「人」を知る

岩田—「人口が増え、経済が大きくなるのが人々を幸せにするのだろうか?」というのは、とても大切な視点だと思いました。高齢者を庇護を受けるべき対象としてではなく、地方にある重要な人材資源と見ている点も素晴らしいです。

最相—経済活性化が真の夢かと問う筆者の発想の転換には、まず目を開かされました。社会変化が激しく、身近な家族がロールモデルにならないという不安を出発点として、地域の資源として「人」を知ることの大切さを説いています。私は、自分が住む地域の歴史や人を知るとは、子供たちに普通の勉強では得られない新しい視点を育てると思っています。この論文は、子供たちにジャーナリスト的な視点を育てる一つの教育のあり方や社会のあり方を示していると感じました。高齢者は、孫より若い子供たち相手だからこそ話せることもあると思います。その話の中に、地域の大切な未来が秘められているかもしれない。いかに地方の未来を創るかという思想的なものが、この論文には込められていると感じ、高く評価したいと思いました。



審査委員長 桑津 浩太郎



特別審査委員 最相 葉月 さん

山之内—私はこのタウンペーパーを「面白そう、読んでみたい」と思いました。高齢者一人ひとりに向き合うことで、取材される側も楽しく、取材する側も伝統や人生経験など多くのことが学べそうです。

野呂—人口減少と高齢化を“多様性の減退”として捉え、「ポケモンGO」になぞらえて新たなサービスを提案しています。高齢者も個性を持った大切な市民の一人だと捉えていて、好ましく思いました。市民一人ひとりから発信する場を作り、地域のコミュニケーション促進につなげるアイデアは即効性がある、地域ごとのストーリーを作っていく良い機会になるという期待感を持ちました。

本田—「持続的にイノベーションを起こす源泉は多様性にある」という発想が、斬新だと思えました。ネーミングも評価できます。

「夕張メロン科」—夕張でしかできないこと

岩田—夕張のマイナス面ではなく、プラスの面に注目している点が良いですね。「夕張市でしかできないカリキュラムを組む」という箇所には心ひかれました。夕張だからできること、夕張でしかできないことは何か、イメージが膨らみ、希望を感じました。

齋藤—地元を背負って、地域再興のために夕張メロンに一点集中する覚悟と力強さを感じます。シンプルなアイデアながら、戦略的でリアリティがあり、実現できれば相当話題を呼ぶと思いました。

山之内—夕張市の財政破綻を当事者目線で捉え、データをまじえて切実な状況を訴えていて、構成力にも優れています。カリキュラムや学校形態に関する検討も具体的です。何より、日本の未来の縮図として夕張を背負っていこうとする志が素晴らしいです。

最相—産業を失った町が何をもって生き残り、力を維持できるかを考え、提案しています。汎用性もあり、例えば高松高校うどん科、中標津高校牛乳科、奄美高校大島紬科など、地元愛から発展させた色々な科が展開できそうです。

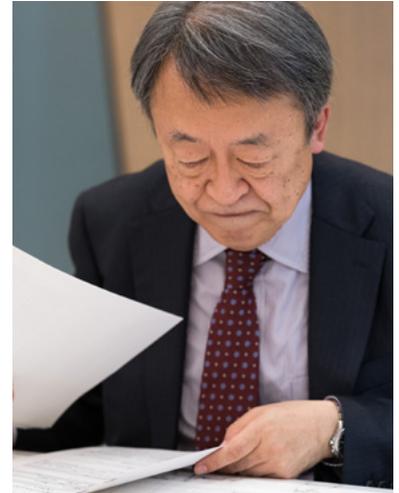
桑津—「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」と「夕張メロン科」は、両方とも最終審査に進めることで異論はないと思います。

唯一の震災復興のテーマの論文を特別審査委員が評価

桑津—続いて評価の高いものとして、「パズル港」、次いで「日高の馬」があります。「演劇」も候補に挙がっています。

「パズル港」—ユニークな災害支援策

池上—東日本大震災の経験から、より迅速な救援策として具体的な提案になっています。この論文だけが震災復興のテーマであることも、評価したいと思います。



特別審査委員 池上 彰さん



審査委員 齊藤 義明



特別審査委員 岩田 徹さん

高校生の部

論文審査会レポート

最相— 波対策として完全に海に水没させるというアイデアが画期的です。統計の使い方にも説得力があり、海から物資を運んだり人を避難させることがいかに難しいかが分かりました。

桑津— 将来的な拡張が期待でき、海外への輸出まで見据えている点も優れています。

池上— 特別審査委員の評価が高いので、ぜひ最終審査に残していただきたいですね。

「日高の馬」— 軽種馬産業の後継者を育てる

齊藤— 未来に残したい産業・職業に対する後継者育成制度として注目しました。実体験に基づいた迫力があり、提案も的を得ています。ホストと体験生との関係設計が一般的な常識とは逆で、体験生がホストに対価を支払う仕組みが必要だと提言している点を評価したいと思います。

山之内— 北海道での自らの体験をきっかけに、軽種馬産業の抱える課題をよく調べ、解決策もよく考えていると思いました。

岩田— 競走馬を育てる仕事に取り組みたい人は確実に存在しますし、牧場主もノウハウを伝えたいと思っています。そこに何らかの化学反応を期待させる、夢のある論文だと思いました。

「演劇」— 演劇により文化教育にイノベーション

野呂— 地方の高校生が感じた「地方にありながら首都圏の文化ばかり享受している」という違和感を課題として捉え、演劇というツールを活用して、伝統文化の継承と理解、地方からの発信、地域間の交流というサイクルを実現したいという提案につながっていて、斬新だと思います。演劇による文化教育も実現性が高く、海外まで異文化交流を広げたいという想いが印象的でした。

本田— 地方創生の手段が「演劇」というのがユニークです。先進国と発展途上国との間の問題解決にも使えるという提案はスケール感もあり、評価したいと思います。

池上— 「日高の馬」は評価が比較的まとまっているので、最終審査に進めて良いのではないのでしょうか。「演劇」は評価が分かれていますね。

桑津— 「演劇」を高く評価している審査委員もいますので、こちらも最終審査に進めてはどうでしょうか。

一同— 賛成です。

桑津— それでは、高校生の部の最終審査対象作品は、「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」「夕張メロン科」「パズル港」「日高の馬」「演劇」に決定します。最終的な順位は12月22日のプレゼンテーション審査を経て決定します。



審査委員 山之内 亜由知



審査委員 野呂 直子





審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

今回は、「地方の課題をイノベーションで解決する。」というメインテーマに「震災復興」「地方創生」「地方の産業改革」というサブテーマを設けました。地方が目下抱えている切実な課題に対する提案を求めるテーマ設定で、ソリューション（解決策）を導くのは大変難しかったのではないかと思います。作品に取り上げられたテーマはバラエティに富み、学生の皆さんの問題意識の多様性が表れていました。大学生の作品には、真摯に課題解決を模索する姿勢が感じられました。高校生の作品には、地に足のついた力強い提案が多く、頼もしく感じました。



特別審査委員

池上 彰さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

今回の応募作品を読んで感じたのは、地域の抱える切実な問題をしっかりと理解し、その解決に大変真面目に取り組んでいるなということでした。言い方を換えれば、限られたテーマについては真面目に書いているけれど、「こんな問題があるのか!」と驚かされるような着想や、壮大な夢のある提案は見られなかったということです。テーマ設定によるところも大きいと思いますが、この点は残念に感じました。そういう中で、高校生の論文には自分が暮らす地域を何とか元気にしたいという強い思いがあふれていて、大変心に響きました。



特別審査委員

最相 葉月さん ノンフィクションライター

今回は「地方の課題をイノベーションで解決する。」というテーマを、「震災復興」「地方創生」「地方の産業改革」というサブテーマで内容を絞ったために、どの論文も書き出しの問題提起部分が人口減少や少子高齢化など、似通っていました。私たちが気が付かないようなところから「それは確かに問題だ」と思うような、意外性のある課題に着目した論文が出てこなかったことは残念でした。高校生の論文には従来の価値観を180度転換させ、地方の未来のために新しい視点を提示している作品が見られ、嬉しく思いました。



特別審査委員

岩田 徹さん いわた書店 取締役社長

若い方たちの論文はとても面白く、楽しく審査させていただきました。高校生の論文には、地方のマイナス面ではなくプラスの面に注目し、その地方でできないことを提案しているものがあり、心惹かれました。また、「高齢者は地方において貴重な人材である」と捉えた視点は、大変素晴らしいと思いました。大学生の論文には、市民レベルで地域の課題に取り組む視点があり、良かったと思いますが、地方の抱える実情にそぐわないものもありました。成功例、失敗例も含めて、もっと地方の実情を学んでほしいと感じました。



審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室 室長

提案された解決策や推進策にリアリティが感じられる提案には、心惹かれました。高校生の論文には、地元を背負って立とうとする力強さや迫力が感じられました。大学生の論文は、着想は優れているのですが、具体策をもっと考え抜いてほしいという感想を持ちました。



審査委員

山之内 亜由知 ITアーキテクチャーコンサルティング部 上級専門職

論文を評価する際には、自らの体験や行動を提案に結び付けているかどうかポイントに置いています。また、提案の具体性や、他の地方への展開の可能性が感じられるものは高く評価しました。高校生の論文は、課題をよく調べ、解決策をよく考えているという印象を持ちました。



審査委員

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

高校生の論文には、地方産業が衰退することへの切実な危機感や、地方を元気にしたいという強い思いが表れていて、共感しました。地方の持つ魅力と可能性を提案につなげた論文には、期待感を抱きました。具体策が掘り下げられているか、実現可能性が高いかという点も重視しました。



審査委員

本田 健司 サステナビリティ推進室 室長

「地方の課題をイノベーションで解決する。」というテーマであるため、提案に“イノベーション”としての要素が感じられるかどうか評価のポイントに置きました。経験に基づく自らの考えを提案につなげている論文には、説得力があり、高く評価したいと思いました。

最終審査会

それぞれの候補者が考えた、「地方課題をイノベーションで解決する」提案をプレゼン



2017年12月22日、東京・大手町のNRI東京本社会議室において、「NRI学生小論文コンテスト2017」の最終審査会が行われました。最終審査会では、論文審査を通過した10論文（大学生の部5、高校生の部5）の執筆者がプレゼンテーション審査に臨みました。

開始にあたり、NRI代表取締役社長の此本臣吾が挨拶。「プレゼンテーション審査では、ぜひリラックスして普段通りの気持ちでのびのびと話をしていただきたい」と述べました。



[最終審査会 審査委員]

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

岩田 徹 いわた書店 取締役社長

ゲスト審査委員

梅野 修 共同通信社 編集局長

審査委員

此本 臣吾 NRI代表取締役社長

臼見 好生 NRI代表取締役常務

横山 賢次 NRI常務執行役員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室 室長

山之内 亜由知 ITアーキテクチャーコンサルティング部 上級専門職

2017年12月22日に東京・大手町のNRI東京本社において行われた最終審査会「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。
(氏名の五十音順にプレゼン。プレゼン時間6分、質疑応答3分)

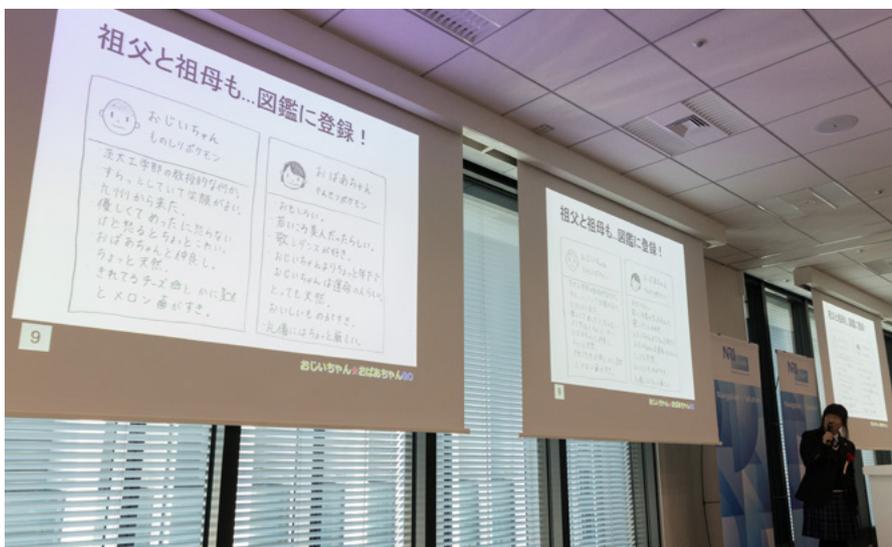
高校生の部

おじいちゃん☆おばあちゃんGO

—多様性を維持し持続的イノベーションを促す主体的な取り組み— 【サブテーマ：地方創生】

堤 ともか 明秀学園日立高等学校2年

プレゼン動画はこちら https://youtu.be/EEYzvCUAL_U



少子高齢化による多様性の減退が日本における最大の問題であり、その結果としてイノベーションの起きにくい閉鎖的な社会が形成されると問題提起。多様性は個性に目を向けるからこそ生まれ、特に同じ地域社会に生活する高齢者は地域の財産であり仲間であると主張し、児童・生徒によるタウンペーパー運動を提案。家族をポケモンのキャラクターに例えて紹介するなど、工夫を凝らしたプレゼンで会場を沸かせました。

審査委員との質疑応答

Q —タウンペーパーをスマホやタブレットに配信すると、特にお年寄りなどではスマホなどを持っていない方も多いため、良い内容の記事が伝わらない人もいないかと心配です。その点はどういった対策を打てばよいでしょうか。

A —お年寄りは主に取材する対象として考えていたので、読んでもらうということをあまり考えていませんでした。

Q —「面白いものではなく、面白くなるまで取材する」ということですが、その秘訣は何だと思いますか。

A —「あの人が面白い」とか「こんな行事が面白い」と言われていることを取材するのではなく、誰も目につけないような、どこにでもいそうな普通の人を面白くしてしまおうという気持ちが大切だと思います。



文化を地方から世界へ

～互いを理解し合う劇で世界をもっとよくしよう!～ 【サブテーマ：地方創生】

長谷川 その香 宮城県宮城野高等学校1年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/IDLzv9dhdNQ>



「良い文化を持っている所が住み良い所」という思いから、地方における文化政策の重要性を主張し、学校教育に演劇を取り入れることを提案。地方文化を題材とした対話劇によって、地方文化への理解、地方文化の発信、異文化交流というサイクルが生まれること、また、この文化政策を地方から日本、さらには世界へと拡げること、平和な世界を作りたいという真摯な思いを訴えました。

審査委員との質疑応答

Q — 中学校では総合的な学習の時間を使うという提案ですが、演劇の経験のある先生がどれほどいるか気になります。生徒にどのように教えるのか、どんなイメージを持っていますか。

A — 演劇や舞台で発表した経験を持っている人は、大学生や一般の人の中にもいると思います。そのような人や演劇のプロの人たちに来てもらって、まず先生たちを指導してもらい、先生たちが生徒に教えるという形でもいいと思います。

Q — なぜ「演劇」なのですか。

A — 私は演劇をやったことはないのですが、演劇で地方を活性化するという内容の本を読み、演劇は誰にでも分かるし、見て「すごいな、楽しいな」と思えるのは演劇なのではないかと思ったからです。

Q — 「良い文化を持つ地域が住みよい地域だ」ということですが、あなたの「わが町の一番誇りに思っている文化」は何ですか。

A — 私は宮城に住んでいるのですが、プレゼン資料にも登場させたゆるキャラの「むすび丸」がとても好きです。お米など、東北ならではの農業や、夏の七夕まつりもとても良い文化なので、それに携わる人たちの対話劇も作ってみたいと思います。



北海道日高地方に見る一次産業の存続

【サブテーマ：地方創生】

宮本 晏寿 都立国際高等学校2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/KWgho7716K0>



競走馬の生産牧場での体験から、命と付き合うことの大変さ、楽しさ、一次産業の大切さを主張。軽種馬産業の後継者不足への対策のために、「体験型後継者教育」で体験生側がホストである生産牧場に報酬を支払う仕組みを提案しました。実体験の強みをもった提案は説得力にあふれ、競馬のPRなども織り交ぜたプレゼンで会場を盛り上げました。

審査委員との質疑応答

Q — 軽種馬産業が低迷している原因は何だと思いますか。

A — 日本人には競馬が深く根差していないということが大きな原因だと思います。海外では、「競馬は世界で一番美しい芸術的なスポーツだ」と言われており、そういった意識を日本人にも普及し、ギャンブルのイメージを払拭して、競馬を「晴れの場」にしていければと思います。

Q — 馬と一緒に生きる人生をイメージできますか。

A — 私は5年ほど乗馬を習っていて、馬は本当に人間に似ていると思っています。動物にも感情があるので、動物を商品としてではなく家族として一緒に生きていけたら、どんなに楽しいだろうと思います。



「夕張メロン科」—地方と若者の挑戦

【サブテーマ：地方創生】

柳沼 千夏 立命館慶祥高等学校3年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/9Pv7FCjiwO8>



夕張メロンを市の産業基盤として発展させると共に、減少傾向にある夕張メロン生産に携わる人材を増やすために、夕張高校に「夕張メロン科」を新設することを提案。落ち着いた語り口による分かりやすいプレゼンからは、「自分たちが暮らす市町村の未来を他人事にせず、自分たちで支えていきたい」という覚悟と地元愛が伝わり、提案の実現への大きな期待感を感じさせました。

審査委員との質疑応答

Q—夕張メロン科を作る場合、1学年の募集人員はどのぐらいをイメージしていますか。また、卒業後はどのような進路が考えられますか。

A—少人数で幅を広げられるような授業を展開していくため、1学年の募集人員は20名程度と考えています。卒業後の進路としては、夕張メロン生産農家として関わっていく場合は、夕張メロンの農家でメロン生産の力を積み、力が付いたらのれん分けという形で自ら生産に関わっていく形を考えています。

Q—実現に向けてぜひ動き出していきたいのですが、次の実現のための一歩として、ご自身はどんな役割を果たそうと思っていますか。

A—私は夕張中学校の出身で、夕張高校の生徒とも交流があります。夕張市役所の中には「まちづくり企画室」という、町に関する企画を行っている部署があるのですが、このプランをまずそこに提案してみたいと思っています。

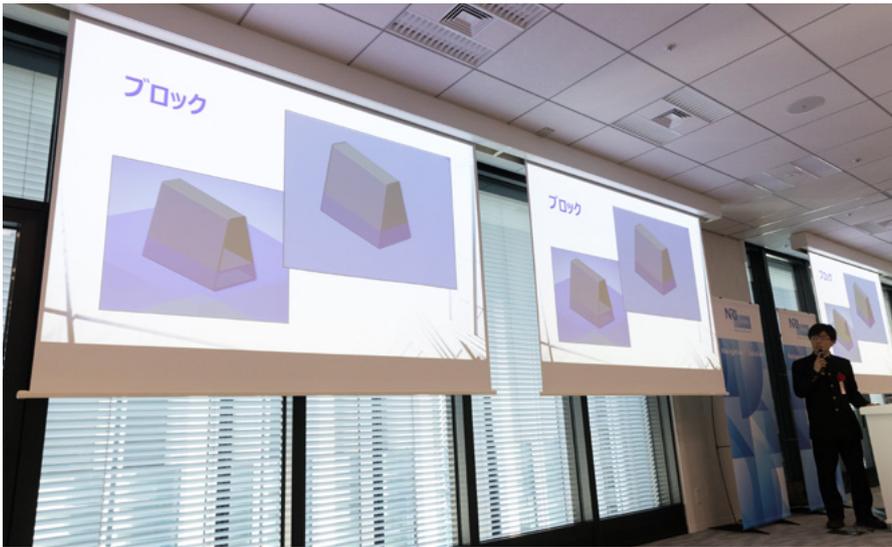


ユニット港湾「パズル港」による災害支援

【サブテーマ：震災復興】

吉田 堯史 久留米工業高等専門学校2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/VLyhTcxhDpU>



災害支援をスムーズに行う手段として、港をユニット化した、いつでも、どこでも、何度でも作ることができる「パズル港」を提案。高波対策として自ら海に沈む自働システムや、環境問題への対応など、その可能性を強調し、巨大構造物の製造・運用はすでに実績ある技術であるため実現性は高く、災害支援への大きな力になると訴えました。パズル港の構造を動画によって表現し、提案への納得感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q—災害時ではないときには、パズル港はどこに、どのように保管しておくことを想定していますか。

A—提案したパズル港の1つ1つのユニットは、コンテナ船用の一番大きなサイズのコンテナにまとめることができます。パズル港は、タイタニック号も入港できるぐらいの大きさと組んでいるのですが、コンテナ船に全て積み込んだ場合、コンテナ船の約半分位の量になります。普段は、日本のいくつかの港に普通のコンテナのように積み重ねて保管しておき、必要な時にコンテナ船で運搬することを想定しています。



鹿児島県の医療業に現場起点型病院経営イノベーションを!

【サブテーマ：地方の産業改革】

榎園 乃里恵 鹿児島大学 法文学部 4年

松田 優太郎 鹿児島大学 法文学部 2年



従業員数が多いにも関わらず人手不足で、労働生産性が低いという鹿児島県の医療業が抱える構造的な課題を指摘。経営者にとっての合理性は全体最適とは限らないと分析し、「現場起点型経営イノベーション」を提案しました。経営判断の発想の起点を経営者から現場へシフトさせることで、職員の働きが医療サービス向上に直結する医療現場に生まれ変わることができると、医療現場での例を挙げながら主張しました。

審査委員との質疑応答

Q —ペアでの応募ですが、どのような分担で書かれたのか、また、どういうところからこのテーマを発想したのか、教えてください。

A —私たちは大学のゼミが同じで、基本的には4年の私(榎園)のほうが指導する立場で行い、いろいろ指示を出しながら、指摘も受けつつ分担して行いました。なぜ医療を取り上げたかについては、身近に医療従事者が多く、命を預かる重要な仕事であるのになかなか報われていない姿を見てきたことから、何とか解決したいという思いがあって産業構造の分析を始めました。

Q —論文で米盛病院をベンチマークとしていますが、なぜ米盛病院を選んだのでしょうか。

A —鹿児島県において、米盛病院がよく講演などで取りあげられるということと、鹿児島大学でも院長が講演を行ったりと米盛病院に触れる機会が多く、どれだけ命を大事に扱っているか、どれだけ効率性を求めて頑張っている病院なのかを知っていたことから取り上げました。



※ご本人の希望により動画公開はしていません

IT人材育成型スマートスクールタウン構想

～ずっとここで暮らせる街づくり【サブテーマ：地方創生】

木田 夕菜 鹿児島大学 法文学部2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/oslCrVwBUGk>



地方の人口減少による学校の空き教室を、IT企業のSOHOとして活用した、IT人材育成型スマートスクールタウン構想を提案。学校と企業とが日常的に自由に交流でき、地元住民と企業とのコミュニケーションを密にして、より寛容な地域コミュニティづくりを行うことができると主張しました。明瞭な声で、聴衆一人ひとりの顔をしっかりと見ながら行われたプレゼンに、会場は惹きつけられました。

審査委員との質疑応答

Q — 企業のSOHOとして、こういう会社に来てほしいという希望があれば教えてください。

A — まずは地元企業から徐々に広げていきたいと思いますので、発展著しい上場企業や、鹿児島市は再開発も進んでいるので繁華街の百貨店などから広げていけたらと思います。また、多くの情報を持っている企業からIT企業を紹介していただくことも必要だと思います。

Q — ITのサテライトオフィスの誘致先を学校と組み合わせた狙い、理由は、どんなところにありますか。

A — 学校の空き教室を活用しようと考えたとき、児童クラブや託児所、老人ホームなどの福祉施設の導入も検討したのですが、その場合、バリアフリーなど校舎の改修が必要です。誘致には企業の負担が少ないことが重要であると考え、ネットワーク環境が整っていれば仕事をすることができ、初期投資が少ない企業として、小規模なITベンチャー企業が適していると考えました。



地方が外国人学生にとっての「第二の故郷」になることを目指して

～「日本ふるさとプロジェクト」の全国的実施による新しい可能性の創出～ 【サブテーマ：地方創生】

中島大地 一橋大学大学院 言語社会研究科2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/nYrGOM2K1A4>



日中学生の交流体験から、地方における「人」との交流に重きを置いた、外国人短期滞在プログラム「日本ふるさとプロジェクト」の全国的実施を提案。その目的は、地方を「第二の故郷」と感じてくれる日本に親しみを持つ外国人を育てること、また、外国人とのふれあいを通じて日本人自身も変わり、グローバル化を実現することであると主張しました。写真を多用したプレゼンテーションで、人との交流の温かさを印象づけました。

審査委員との質疑応答

Q—この取り組みを行う運営主体についてはどう考えますか。また、1カ所どのくらいの期間行うことをイメージしていますか。

A—外国人学生を招くため、夏や冬などの休みの期間に限られますが、現地の大学や高校と連携できれば、教育の一環として来日してもらうことができ、期間は拡がると思います。運営主体については、学生では継続性の面で問題もあると考えられるため、全国の自治体の中に外国人向けの部署を作ることが必要だと思います。

Q—「外国人との交流によって、日本人自身も変わっていくことが大切だ」ということですが、ご自身は外国人との交流によってどのように変わりましたか。

A—自分は大学に入るまでは中国のことをあまり知らず、入学後に中国語を勉強して中国の方と交流するようになりました。実際に話をしてみても、興味や関心は日本人と変わらないということを感じました。外国人を単に労働力として見るのではなく、日本に対して好意を持ってくれる外国人と共に日本を作っていく、という意識が大切だと思うようになりました。



コンパクトシティ実現に向けた公共ライドシェアリング

【サブテーマ：地方創生】

仁科 慎也 慶應義塾大学 経済学部 4年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/2d3Cyaqlgtw>



地方における中長期的なコンパクトシティ化によって、交通サービスを受けられない郊外住民の足となる、無料の公共ライドシェアの導入を提案。ドライバーとなる住民には公共施設の優遇サービスを提供し、郊外住民が市街地に足を運びやすくすることで、自治体は公共施設の集約化を先行することができ、郊外住民は現在の生活のままで公共サービスを受けられるため、双方にメリットが生まれると訴えました。

審査委員との質疑応答

Q —すでにライドシェアリングを導入している地域では、おそらく相当な費用がかかっていると思います。それならばタクシーチケットを配ったほうが予算的には安く済み、住民全体が高齢化している町では、やはり既存のタクシー会社に頼んだほうが様々な面で便利なのではないかと思うのですが、どう思いますか。

A —日本では規制上、ライドシェアでは金銭のやり取りができません。しかし将来的には、絶対にライドシェアは必要になると予想されますので、初期投資は高くついても少しずつペイしていければよいのではないかと考えています。

Q —様々な理由でコンパクトシティ化がうまく進まない中で、「公共ライドシェアがどの程度効くのか、決定打になるのかよく分からない」と言われたら、どう答えますか。

A —決定打になるかという点、これ自体ではならないとは思いますが。コンパクトシティ化はどの地域でも進めなくてはならない課題なので、住民との交渉を進める中で、公共ライドシェアは重要なポイントになってくるのではないかと考えています。



建設前から始めるインフラツーリズム戦略

～インフラ総建て替え時代への提言～ 【サブテーマ：地方創生】

山崎 優斗 立命館大学 経済学部2年

三宅 浩太 立命館大学 経済学部2年

プレゼン動画はこちら <https://youtu.be/gjuskr8V3bQ>



地方に今ある観光資源の魅力を最大限に生かすことができる、「インフラツーリズム」を地方創生の要とすることを提案。そのためには建設前からの戦略策定が不可欠であり、周辺観光地と連携してインフラを地域のランドマークとすることがポイントであると訴えました。インフラの老朽化による建て替え工事は絶好の機会と捉えるべきだと印象付けました。

審査委員との質疑応答

Q — 建設前からインフラツーリズムに取り組んでいくには、自治体が公共工事などで新しく建物を建てる早い段階から、こういった考え方を知ってもらわなくてはなりませんが、考えを普及させる方法はありますか。

A — 建設会社などに、インフラの建設前からインフラツーリズムのコンセプトや計画を策定することが重要であると伝えることがポイントだと思います。インフラを管理する地方自治体と建設会社をつなげていくような活動ができたらと考えています。

Q — インフラに対する人々の関心を持続させるには、どうしたらよいと思いますか。

A — 興味を惹くためには、周辺地域との連携が必要不可欠で、周辺地域の人たちにもインフラツーリズムのメリットを伝え続けていくことが大切だと思います。



最終審査結果および評価のポイント

Share the Next Values!

「地方の課題をイノベーションで解決する。」

「地方の課題をイノベーションで解決する。」をメインテーマとして開催された「NRI 学生小論文コンテスト2017」は、大学生・高校生の各5作品（計10作品）が最終審査に進みました。

2017年12月22日の最終審査会において、筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞論文を決定しました。

大学生の部

大賞

【サブテーマ：地方創生】

建設前から始めるインフラツーリズム戦略

～インフラ総建て替え時代への提言～

山崎 優斗 立命館大学 経済学部2年

三宅 浩太 立命館大学 経済学部2年

評価のポイント

身近なところにあるインフラ設備を機能論だけで捉えず、景観美やストーリー性、エンタテインメント性を持たせることで総合的価値を引き上げ、インフラツーリズムを地方創生の要にしようと提言。インフラツーリズムに適した施設にするための具体策も興味深く、地方の観光ビジネスの可能性を示唆している点を高く評価した。汎用性も高く、各地の老朽化したインフラ施設の整備にあたる際にも重要な視点であるとして、審査委員の評価を集めた。

優秀賞

【サブテーマ：地方創生】

IT人材育成型スマートスクールタウン構想

～ずっとここで暮らせる街づくり

木田 夕菜 鹿児島大学 法文学部2年

評価のポイント

地方から流出する若者を抑制し、魅力的な進学先・就職先を作りたいという筆者の強い思いが心に響いた。IT人材の将来の不足を踏まえて、小学校・中学校・高校にITを正式科目として導入し、戦略的に人材育成を図るという考え方には審査委員の共感が集まった。文章力や論理展開力に優れ、コンセプトと解決策の記述も具体性に富んでいて興味深い。実現可能性の高さから全国展開への期待感を持った。

優秀賞

【サブテーマ：地方の産業改革】

鹿児島県の医療業に

現場起点型病院経営イノベーションを！

榎園 乃里恵 鹿児島大学 法文学部4年

松田 優太郎 鹿児島大学 法文学部2年

評価のポイント

鹿児島県の医療業の現状を病院経営の現場から捉え直し、聞き取り調査やデータを駆使して鋭く分析している。経営者起点型と現場起点型という視点から、経営資源として「時間」という概念を切り出し、施設デザインという解決策につなげていく問題解決の手法が独創的である。論文としての完成度も高く、同様の課題を抱える他の業態に汎用性があるとして、高い評価を得た。

特別審査委員賞

【サブテーマ：地方創生】

コンパクトシティ実現へ向けた

公共ライドシェアリング

仁科 慎也 慶應義塾大学 経済学部4年

評価のポイント

地方の人口減少に伴いコンパクトシティ化が進むなか、公共サービスを十分に受けられないエリアが拡大せざるを得ない状況下で、公共ライドシェアリングに着目。運用方法や会員システム、公的施設との連携など、郊外部の公共ライドシェアリングの実現方策を検討する姿勢や、地域の抱える問題を解決しようとする視点とアプローチが評価された。

特別審査委員賞

【サブテーマ：地方創生】

地方が外国人学生にとっての

「第二の故郷」になることを目指して

～「日本ふるさとプロジェクト」の全国的実施による新しい可能性の創出～

中島大地 一橋大学大学院 言語社会研究科2年

評価のポイント

日中学生交流プロジェクトへの参加体験にもとづき、地方の魅力と可能性に着目。「人」との交流に主眼を置いた、外国人学生の短期滞在プログラム「日本ふるさとプロジェクト」を提案している。市民レベルでの故郷と友人づくりが地方活性化と国際交流、ひいては世界の平和につながるという視点は、日中韓、北朝鮮問題を抱えるいま、説得力があり、審査委員の共感を集めた。

高校生の部

大賞

【サブテーマ：地方創生】

おじいちゃん☆おばあちゃんGO

—多様性を維持し持続的イノベーションを促す主体的な取り組み—

堤 ともか 明秀学園日立高等学校2年

評価のポイント

まず、地方にとって経済活性化が真の幸せかと問う筆者の発想の転換に目を開かされた。地方において持続的なイノベーションを起こす源泉は人の多様性であり、人を知ることが大切であるという主張が力強い。高齢者を地域資源と捉え、子供たちの取材によって電子版タウンペーパー「おじいちゃん☆おばあちゃんGO」を作り地域のコミュニケーション促進につなげようという提案は独創性にあふれ、高い評価を集めた。時流のサービスをもじったネーミングも秀逸。教育のあり方や地域社会のあり方までも考えさせられる提案である。

優秀賞

【サブテーマ：地方創生】

「夕張メロン科」—地方と若者の挑戦

柳沼 千夏 立命館慶祥高等学校3年

評価のポイント

夕張市だからこそできることに着目し、産業基盤としての夕張メロンをさらに発展させるために、普通高校に「夕張メロン科」を新設して人材育成することを提案。夕張メロンに一点集中する視点には、シンプルながら地域再興へのリアリティと力強さを感じられる。カリキュラムや学校形態に関する検討も具体的で、後継者不足に悩む国内の特産物において全国展開が期待できる。日本の未来の縮図として夕張を背負っていかうとする筆者の志の高さも評価を押し上げた。

優秀賞

【サブテーマ：地方創生】

北海道日高地方に見る一次産業の存続

宮本 晏寿 都立国際高等学校2年

評価のポイント

後継者不足や担い手の高齢化といった軽種馬産業の抱える課題をよく調べ、意欲のある中学生・高校生に対する体験型後継者教育という提案につなげている。競走馬の生産牧場での実体験に基づく提案には迫力と納得感がある。北海道の産業育成を支える提案として実現への期待感を抱かせ、未来に残したい他の一次産業や職業に対する後継者育成制度として汎用性も高い。

特別審査委員賞

【サブテーマ：震災復興】

ユニット港湾“パズル港”による災害支援

吉田 堯史 久留米工業高等専門学校2年

評価のポイント

東日本大震災に学び、予期される首都直下型地震・南海トラフ地震に備え、海からの災害支援を効率的かつ迅速に行える移動可能な港湾“パズル港”を提案。ユニット式の部材や高波対策として自動的に水没させるシステムなどのアイデアは独創的で、地方の震災復興にとどまらず、海外への輸出や災害支援まで見据えている点にも視野の広さを感じられる。唯一の「震災復興」をテーマにした作品としても、審査委員の評価を集めた。

特別審査委員賞

【サブテーマ：地方創生】

文化を地方から世界へ

～互いを理解し合う劇で世界をもっとよくしよう！～

長谷川 その香 宮城県宮城野高等学校1年

評価のポイント

「地方に住みながら首都圏の文化を一方向的に享受している」という問題意識をベースに、地方創生の手段として「演劇」による文化教育に着目した点がユニーク。地方文化への「理解」、地方からの文化の「発信」、地域間の「交流」という3つのサイクルを演劇というツールを活用して実現したいという提案が斬新である。演劇を使った文化教育は実現可能性が高く、教育メソッドを世界に広げていくことで異文化交流を深めたいという筆者の熱い思いにも心動かされた。



審査委員長
桑津 浩太郎 NRI 研究理事

今回の「地方の課題をイノベーションで解決する。」というテーマは、震災復興や地方創生、地方の産業改革といった、地方が目下抱えている切実な課題をいかに解決するかという、例年になく難しいテーマであったのではないかと思います。NRIグループにおいても、同様の課題意識を持って業務に取り組んでいますが、皆さんのプレゼンテーションを聞いて大変刺激を受け、より現場に即した、思い切った発想がいかに大切かということを再認識しました。今回は多くの学生の皆さんにコンテストにご参加いただき、ありがとうございました。



特別審査委員
池上 彰さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

論文を読むだけでなく、プレゼンテーションも見ることができ、非常に刺激を受け、勉強になりました。論文として優れている作品に、プレゼンでは順番を組み替えたり、他の事柄を加えたりといった創意工夫がみられ、素晴らしいと思いました。心を打つプレゼンには、どこか人間くささが感じられるものであり、「なぜ自分はこういうことをしようと思ったのか」という問題意識や、「私はこう変わった」という個人的な想いが表現されていると、説得力が増すものだと思います。高校生のプレゼンテーションにはこのような点が強く表現され、粗削りな魅力が心に響きました。大学生の論文は、論理的に仕上げられているがゆえに角が取れてしまった印象があり、残念に感じました。



特別審査委員
最相 葉月さん ノンフィクションライター

学生の皆さんの素晴らしいプレゼンテーションに圧倒されました。私は論文を審査するとき、筆者がなぜその論文をそのテーマで書いたのか、どういう世界観を持ってそのテーマに挑んでいるのかということが一番知りたいと思っています。そういった点をしっかりと感じ取れる論文を高く評価しました。一方で、審査委員を裏切ってくれるような、「こんなことできるわけない」と思うような意外性のある突き抜けたテーマやアイデアも期待していて、今回はそのような論文が少なかったことを、残念に思いました。また、社会で目下起きている問題に対して、20～30年先の未来という幅で考えているのは、なかなか斬新な発想は出てこないのではないかと感じました。



特別審査委員
岩田 徹さん いわた書店 取締役社長

学生の皆さんのプレゼンを大変面白く、楽しく聞かせていただきました。人口減少、少子高齢化など、今、地方が抱える多くの問題は、近い将来、都会にも確実にやってきます。私は今、地方の過疎のまちで暮らしていますが、その暮らしを大変心地良く感じています。例えば、二世帯で暮らすことで孫の成長を見られたり、職住接近で通勤のストレスがなく働く時間をしっかり確保できたり、ナショナルチェーン店がないため個人商店でも商売ができるなど、これまで地方のハンディキャップだったものが、アドバンテージに変わっています。若い方々にはぜひ60歳になった自分に何が必要かをイメージしてみしてほしいと思います。そのイメージに向かって、一歩ずつ歩いてほしいと思います。

表彰式

Share the Next Values!

「地方の課題をイノベーションで解決する。」

2017年12月22日、最終審査会に続いて、東京・大手町のNRI東京本社会議室において「NRI学生小論文コンテスト2017」の表彰式が行われました。表彰式では、NRI代表取締役社長 此本臣吾が、12名の受賞者（大学生の部7名、高校生の部5名）一人ひとりに表彰状と副賞を授与し、受賞をたたえました。



晴れやかな表情の受賞者のみなさん、おめでとうございます！



受賞者一人ひとりにNRI社長の此本から表彰状を手渡しました



大学生の部 大賞

建設前から始めるインフラツーリズム戦略 ～インフラ総建て替え時代への提言～



山崎 優斗 さん 立命館大学 経済学部2年

このような光栄な賞をいただき、大変嬉しく思っています。2017年4月から「インフラツーリズム」というテーマで研究を続けてきて、今回2人でその成果を発表することができました。それがこうして表彰され、評価されたということは、私の人生の中において大切な記憶になると思います。本日の表彰を胸に、今後の研究にも力を入れ、より実現性、持続性の高い研究を積んで、またどこかで発表したいと思います。本日はありがとうございました。

三宅 浩太 さん 立命館大学 経済学部2年



今回の論文を書くにあたって、地方の現状について調べることから始めたのですが、出てくるのは少子高齢化や「地方が今厳しい状況にある」といった情報ばかりで、自分たちにできることは本当にあるのだろうかと考えてしまいました。そんなとき過去の受賞論文を読み、同年代の人たちが革新的なアイデアを提案していることが励みになり、論文を書き上げることができました。2人で模索しながら積み上げてきた研究がこのような過大な評価を得たことは、今後に向けて大変励みになります。

高校生の部 大賞

おじいちゃん☆おばあちゃんGO —多様性を維持し持続的イノベーションを促す主体的な取り組み—



堤 ともか さん 明秀学園日立高等学校2年

今回、私がこのコンテストに応募したきっかけは、担任の先生からコンテストを紹介され、「応募してみようかな」という気持ちになったからでした。大賞という、夢にも思っていなかったようなすごい賞を頂き、驚いているというのが今の正直な気持ちですが、とても嬉しいです。本当にありがとうございました。この受賞を自信に変えて、将来の目標に向かって、これからも一生懸命頑張っていきたいと思っています。

懇親会

Share the Next Values!
「地方の課題をイノベーションで解決する。」

2017年12月22日、最終審査会・表彰式の後、NRI東京本社29階のカフェエリアにおいて懇親会が行われました。受賞者、特別審査委員、NRI審査委員や役員・社員、過去のコンテストの受賞OB・OGが、論文について語り合ったり、記念撮影する和やかな光景が見られました。



NRI社長の此本や審査委員、社員らと懇談する受賞者たち



共同通信社 梅野さん 特別審査員の岩田さんと

受賞者同士も交流

特別審査員の池上さんと



特別審査員の最相さんと



受賞OB・OGも招待され、交流を深めた

コンテスト優秀賞受賞者が、夕張市長を訪問

高校生の部で優秀賞を受賞した柳沼千夏さんが、
2018年2月21日、夕張市役所に鈴木直道市長を訪ね、受賞を報告しました。

高校生の部 優秀賞 受賞論文

「夕張メロン科」——地方と若者の挑戦

立命館慶祥高等学校3年 柳沼 千夏さん（北海道）

柳沼さんは夕張出身で、中学卒業まで夕張市で過ごしました。その地元愛から、メロンを夕張市の産業基盤として発展させるために、メロン生産に携わる人材を教育する「夕張メロン科」を夕張高校に新設することを提案。その地域再興へのリアリティと力強さが高く評価されました。



鈴木直道夕張市長を訪問した柳沼千夏さん

「学生として教育面での地域活性化策を提案した。 いずれ夕張の力になれば」——柳沼さん

柳沼さんは「私の通う学校では3年のときに、興味のあるテーマに取り組んで論文を書く『課題研究』という授業があります。私は2年の頃から夕張の地方創生について書きたいと思っていたのですが、なかなかテーマが決まらなくて、考えた末に教育というテーマに注目して『夕張メロン科』を提案する論文を書きました」とテーマに至った経緯を説明。「私自身はメロン農家の出身ではないので『これでいいかな、合っているかな』と思いましたが、一つの提案として出させて頂くことができ、感謝の気持ちで一杯です」と受賞へ想いを述べました。

「夕張のことを夕張出身者として思ってもらえていること、 由緒あるNRIの小論文コンテストによって、多くの方に市の実情を 知ってもらおう機会になったことがありがたい」——鈴木直道 夕張市長

鈴木市長は「夕張メロン科の提案に行き着くまでには、時間をかけて地元を見つめて頂いたのだらうと感じています。今回初めて行われたというプレゼンも含めた総合的評価において、多くの応募作品の中から優秀賞を受賞されたことは素晴らしいと思います」と受賞を称賛。「都市での人口減少など、これからの日本にはこれまでの経験が通用しない初めてのことが起こってくると思います。過去の経験にとらわれない若い世代の発想は大切ですし、学生の時だからこそ堂々と言えることもあります。柳沼さんのアイデアや、町に対する誇り・想いを持って、これからもぜひ頑張ってください」と、2018年春から大学生活が始まる柳沼さんを激励しました。

「NRI学生小論文コンテスト」は、毎回さまざまなメディアで取り上げていただいています。その一部をご紹介します。



「夕張高にメロン科を」
立命館慶祥高 柳沼さん優秀賞
学生小論文

全国の高校生や大学生が地方の活性化などをテーマに、課題や解決法を提案する学生小論文コンテスト「野村総合研究所主催」が22日、東京都内で行われた。道内からは立命館慶祥高3年の柳沼千夏さん18人が参加し、柳沼さんは「最高賞」に選ばれた。

夕張市の活性化について提案する立命館慶祥高の柳沼さん

「夕張高にメロン科を」をテーマにした柳沼さんは、市内唯一の高校である夕張高に「夕張メロン科」を設け、高校を夕張メロンの生産者として育てる考えを発表した。生徒が生産から販売までを学ぶことで、海外への販路拡大を目指す人財を育てる。夕張高の魅力が高められ、道内外から生徒が集まることを強調、実現に向け、市の担当者へ提案したい具体的な考えもあるという。

また、同じく優秀賞を受賞した都立国際高2年の宮本琴寿さん17は馬産地の日高管内を支える軽種馬産種について発表した。回管内養馬に携わり、競走馬の生産現場を体感をもとに、後継者不足などの課題を挙げた。

コンテストには1767点の応募があり、審査を通過した12人が発表した。

『北海道新聞』2017年12月23日(土) 朝刊 第4社会面



夕張出身 立命館慶祥高・柳沼さん
学生小論文優秀を市長報告

【夕張】全国の高校生や大学生が地方活性化などをテーマに課題や解決法を提案する「学生小論文コンテスト」で最高賞に次ぐ優秀賞に選ばれた立命館慶祥高3年の柳沼千夏さん18が、22日、夕張市役所を訪れた。柳沼さんは「最高賞」に選ばれた。夕張市長は「夕張高にメロン科」を設け、高校を夕張メロンの生産者として育てる考えを発表した。生徒が生産から販売までを学ぶことで、海外への販路拡大を目指す人財を育てる。夕張高の魅力が高められ、道内外から生徒が集まることを強調、実現に向け、市の担当者へ提案したい具体的な考えもあるという。

また、同じく優秀賞を受賞した都立国際高2年の宮本琴寿さん17は馬産地の日高管内を支える軽種馬産種について発表した。回管内養馬に携わり、競走馬の生産現場を体感をもとに、後継者不足などの課題を挙げた。

コンテストには1767点の応募があり、審査を通過した12人が発表した。

『北海道新聞』2018年2月24日(土) 朝刊 地方面(空知)

『京都新聞』2017年12月23日 朝刊 19面
立命館大の2人らに野村総研論文大賞

『長崎新聞』2017年12月24日 朝刊 8面
野村総合研究所、学生論文 地域の課題解決 大賞に堤さんら

『南日本新聞』2017年12月26日 朝刊 3面
NRI学生小論文コンテスト2017

『読売教育ネットワーク会報』2017年12月号 11ページ
高校生・大学生が地方に提言／NRI学生小論文コンテスト

『高校生新聞』2018年1月号・3月号
第12回NRI学生小論文コンテスト2017
メインテーマ Share the Next Values! 地方の課題をイノベーションで解決する。